

てゐる様に思はれる。この意味に於てこの論文集が博士にとつて意味ある許りでなく、近世日本哲學史上なくてはならぬ貴重な文獻である。私は今その内容に亘る詳細な紹介をする餘裕も資格もないのであるが、特に注目すべき二三の論文を擧げるならば、「現代思想界に於ける『天潮流』以下に於て現代文化の意義を闡明にし、現代哲學思想の依つて來る流れを理解するにはこの上なき適當な文獻である。」「經驗的より先驗的（以下に於ては既に經驗的心理主義の矛盾を捨て、論理的理想主義の立場を確立せられた。次に「フイヒテの我に就て」、「カントの世界觀」など博士の卓見と圓熟せる思想を見るに忘れてはならぬ論文である。その他ブラグマチズムに關し、更には新實在論の人生觀を論じ、ベルグソンに就いて説くなど、博士の論文は限りなき興味を引かずにはゐない。更には、「關係に就て」、「世界觀の哲學に就て」などに所謂生の哲學を明瞭に紹介して、最も根本的なものより出發する哲學が我等の究竟的な要求を満すものであることを明かにせられてゐる。實踐哲學の方面に關しては「誠論」、「倫理哲學の『可能性に就て』」などに於て、倫理學が先驗的であらねばならぬことを明かにし、然もそこには東洋思想の特色が融合せられ、獨自の理想的な熱情的な主張が明かに博士の人格を彷彿とさせるのである。「ボルツァノの知識學に就て」は蓋し博士の力作であつて、その明晰なる洞察は我等後進に益する所のものが多い。

博士はこの頃を境として先驗論理主義の立場から純粹現象學の立場に進み行かれた様に見える。然してこの思想的轉換後の

學内彙報

論文として「問題の學としてのガイザーの形相學に就いて」と、「究竟者」が注目されねばならぬであらう。「究竟者」に於て博士の主張を視ふに、哲學の求むる「究竟者」は直接的な意識であるが、然もこは經驗的なを得ず、又單なる論理であることも出來ない。却つて感性的規定を離れ、論理的構成以前に求めらるべき先驗的意識であらねばならぬ。これこそ意味統一としてイデアを産む無限の生々であり、然してこの究竟の絕對自我が自らを知る所に直觀的となり、意識的となり、その生産の作用が即ち所産となると説いてゐる。かくて博士の思索生活は常に發展して單なる批評主義に止らず、意識の本質に關する深い洞察を得、こゝに眞に理想主義に對して究竟の根柢を築けるものであつた。然も博士の文章は簡明で、所謂哲學論文に於て感ぜしめられる難解晦澁の跡を示さず、誠に得難き好著である。敢て江湖の一讀を薦める（發行所、大村書店）。（S. H. J.）

學内彙報

佛教研究會

○十一月七日（月）午後三時より新館會議室に於て例會を開く、講師、演題左の如し。

一、初期大乘に於ける淨土と一生補生

との關係

加藤智學氏

赤沼、大須賀、上杉、寺本、稻葉等諸教授、西本書監及學生の聽講者數多あり、意義深い研究發表なりき。

□十一月廿五日(金)午後三時より新館會議室に於て例會を開く、講師並に論題左の如し。

一、平安末期に於ける南都系の淨土教

高西賢正氏

學生の聽講者數多あり、出色ある研究發表なりき。戴せて本號にあり、一讀を勧む。

□十二月八日(金)午後三時より圖書館樓上に於て開く。

一、淨土教亦原始佛教 河野法雲氏

研究發表といふよりも先生自身の現在佛教研究一般に對する批判なりき。現在研究學界よりいへば難點多からんも、學者再考して進むべき善き指南たりき。寺本、加藤、大須賀、林等の諸教授西本書監其の他學生多數會し、講演後質問續出し盛會なりき。(日暮)

哲學研究會

□九月廿六日(月)午後七時より新館會議室に於て例會を開く。講師、演題左の如し。

一、美の鑑賞と創造

木村素衛氏

哲學科諸教授、學生多數出席、質疑往來して盛會なりき。

□十月廿一日(金)午後七時より新館會議室に於て例會を開く。講師、演題左の如し。出席者哲學科教授、學生多數にて十時閉會。

一、現代社會學の中心問題

若栗現照氏

哲學會秋期大會

□十一月廿三日(日)新館會議室に於て本年度大會を開催。學内哲學科諸教授は勿論、學外よりの參聽者多數にて意義深き收獲をのこして盛會裡に終る。會後萬養軒に於て晚餐會をなす。講師、演題左の如し。

一、カント哲學に於ける「構想力」と「判斷力」

木場了本氏

□十二月十日(土)午後七時より新館會議室に於

て鈴木大拙教授の近著“Essays in Zen Buddhism”

の出版記念會祝賀會を開く。定刻、木場教授の

祝辭に次いで鈴木教授は約一時間有半に亘つて

本著出版の動機、内容に亘つて縷々と述べられ

た。それより茶話會に移り、種々なる問題に就

いて同教授の豊富にしてつきざる意見をたゞき

時を忘れた。十一時散會

□一月廿八日(土)午後七時第十八教室に於て、

哲學研究室助手、牧野体山君の入營送別會を兼

ねて例會を開く。會者多數、盛會なりき。講師

演題左の如し。

一、カントに於ける根本惡と再生に就

て

立花 勝氏

史文會大會

十一月十九日第一教室で開催。學部長専門部長

以下教授學生多數參聽。講演後矢尾政にて晚餐

を共にす。

近世支那の學問界の二大潮流

神田 喜一郎氏

金春禪竹の歌道について 能勢朝次氏

國史研究會

輪 讀 會

□一學期と同じく吾妻鏡を輪讀。

史蹟踏査會

□九月二十四日豐國神社、妙法院、泉涌寺、東

福寺を調査、橋川教授指導。

十月廿二日から卅一日まで關東へ旅行。別記旅

行記參照。

□十一月五日大藏會を博物館に見る。

國史研究會大會

□十二月四日(日)午前は圖書館閱覽室に栗津文

庫を展覽し、午後左記の講演會を催す。會後陸

福園で晚餐を共にす。

一、神社の起原

中村直勝氏

一、佛教文化の通俗化

橋川 正氏

國文學會

輪讀會

□一學期につゞきて古事記を輪讀す。

秋期講演會

□十一月十九日午前十時より圖書館樓上にて開催。

一、鈴木朗の雅言音聲を中心にして

清光法龍君

一、百人一首の撰者について

吉澤義則氏

編輯後記

◆幸先よかるべき大谷學報改題號は、種々の事情に禍されて遅延に遅延を重ね、讀者諸氏にはまことに相濟まぬ事と思つてゐます。生るゝものゝ苦しみと云つても、生れた以上は健かに育てさせたいのが私達の念願であつて、唯伸びゆく將來に希望をかけて頂くことを念じます。

◆豫告いたしました眞宗大谷派學事史號は種々準備の都合もありますので、第二號の豫定を變更して第三號を特別號とすることに致しました。あしからず御了承の程を願ひます。

◆從來の佛教研究會は今度大谷學會と改稱し、大谷大學の凡ゆる研究機關を有機的に綜合することになりました。従つて大谷學會に於ける凡ての研究は大谷學報を通じて發表せられ、こゝに大谷學報は内容ある研究雜誌として世に見えることゝ存じます。

◆昭和戊辰の春に當つて本誌の未來に成果あることを約束します。第二號は四月初旬發行の豫定です。(いなば)